論　文

『ジェイン・エア』にみられるヴィクトリア朝イギリス社会(2)

加塩　里美

Victorian Society in *Jane Eyre* (2)

Satomi KASHIO

Abstract

This paper deals with the historical background to Charlotte Brontë's *Jane Eyre*, the Victorian era. The first chapter looks at *Jane Eyre* and Imperial colonial policy. In *Jane Eyre*, people live in two important cities of the triangular trade of the empire having a great influence on the life of the heroine. The subject of this chapter is the relationship between the description in the novel and the real life of people. Next, the second chapter deals with the feeling of the British for foreign people. Through the description of foreign women, the virtue of Jane clearly comes to light. The social condition of Imperialism makes them appear as a foil to the English heroine. Finally in the third chapter, the view of marriage in the middle class is the subject matter. The social phenomenon "Odd Women" casts light on the history of the time. Because of the fact, marriage without the joy of love is not so unusual. Nevertheless it is clear that Jane's being "the Angel of the House" and her words, "...we are precisely suited in character; perfect concord is the result." are both the ideals of young women.

キーワード：1.『ジェイン・エア』　2. 大英帝国の植民地政策　3. リスペクタビリティ
4. 女余り現象　5. 家庭の天使

Key Words：1. *Jane Eyre*　2. Colonial policy in the British Empire　3. Respectability
4. Odd Women　5. the Angel in the House

日本語要旨

シャーロット・ブロンテによって1847年に世に出された『ジェイン・エア』は，たちまち評判となり，ヴィクトリア女王をはじめ，多くの人々に読まれる名作となった。架空の小説の中に，当時の社会情勢や気運を的確にとらえて描き出したことも，人気を博した一因である。

本稿の第１章では，小説内の描写や登場人物の発言から，当時の社会における植民地と宗主国の関係を取り上げる。ヴィクトリア朝イギリスと植民地との関係を通して，おもに男性の生き方という観点から作品を考察する。

次に，第２章では，女性達をめぐる発言から，ヴィクトリア時代中期のイギリスの女性や文化と，他の国の女性や文化とを比較検討する。それによって，作者がこの記述にこめた考え方を探る。対照的なこれらの描写から，他の国の女性に対する当時のイギリスの人々の意識を作中から読み解くものである。

第３章では，ジェインを中心として，中流階級の人々の結婚観について考察する。小説の中で，ジェインは２人の男性との結婚を考える。ジェインとロチェスター，ジェインとセント・ジョンと

いう２組の関係は，非常に対照的とも言える。この２人の男性の行動や考え方から，当時の中流階級の結婚の姿がみえてくる。この時代の特徴である「女余り現象」を抱えるイギリスにおける女性の生き方という観点から，結婚に的を絞り検証を加える。

主人公の生き方を貫く強固な意志や道徳心と共に，情熱が読者の心をひきつけ，最終的には「家庭の天使」という生き方を自らが選びとる様子は，多くの女性が望む「幸福な家庭」への憧れを示している。これらの議論から見えてくるのは，ジェインが体現する「ヴィクトリア朝イギリス女性の理想像」である。

第１章　大英帝国と植民地

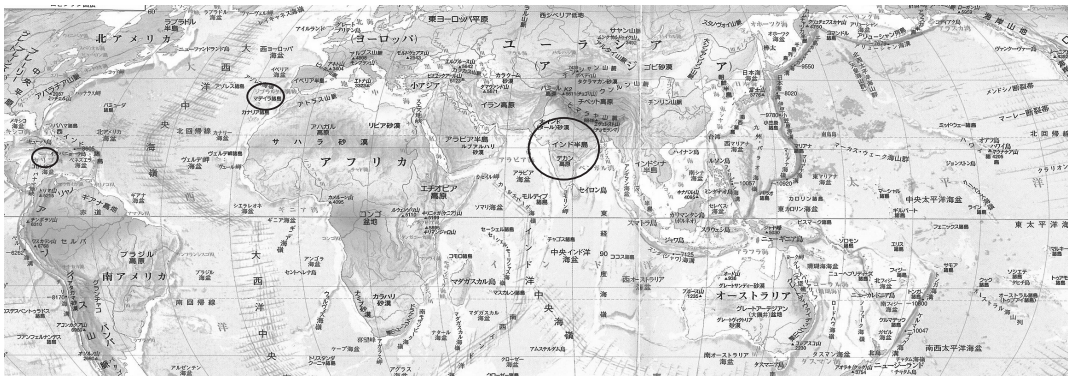
シャーロット・ブロンテによって1847年に世に出された『ジェイン・エア』は，たちまち評判となり，ヴィクトリア女王をはじめ，多くの人々に読まれる名作となった。架空の小説の中に，当時の社会情勢や気運を的確にとらえて描き出したことも，人気を博した一因である。そこで第１章では，小説内の描写や登場人物の発言から，当時の社会における植民地と宗主国の関係を取り上げて検証し，この小説が不朽の名作となり得た根拠を探る。

第１節　植民地政策

小説『ジェイン・エア』が書かれた19世紀中葉は，イギリスが世界各地に植民地を持ち，めざましく発展を遂げていた時代である。登場人物の中にも，植民地と深いつながりを持つ者がいて，彼らによって主人公の人生は大きな影響を受けることになる。

ここではまず，バーサの故郷である西インド諸島のジャマイカと，ジェインの伯父の住んでいたマデイラをとりあげる。この２つの地域は，共に奴隷労働を基盤にした宗主国の繁栄を支えた三角貿易の拠点であったことを指摘し，作品の背景を考える。

次にインドに関して，作品中のヒンドゥー教に対する言及から，イギリス本国の人々の目にどのように映っていたのかを指摘する。これら３つの地方の，地理的関係を示すと次のようになる。 地図の印は，左からジャマイカ，マデイラ，インドの位置を表す。



帝国書院編集部編『新詳高等地図』初訂版，帝国書院，2009年，157-158ページから引用。

第２節　ジャマイカとマデイラ

作品の背景を探るためには，当時の歴史的事象と照らし合わせて検証する必要がある。そこでまず，『ジェイン・エア』が出版された1847年から，作中に設定した年代をさかのぼってみたい。登場人物とジャマイカとの関連が生まれるのは，ロチェスターがバーサと結婚したことを契機にする。この２人がジャマイカで結婚した年を特定し，４年間暮らしたジャマイカのスパニッシュ・タウンでの，彼らの生活環境を考えてみたい。

『ジェイン・エア』が出版されたのは，1847年のことである。当時，ジェインは30歳という設定であった。ジェインがロチェスターと結婚して10年経っている（Ch. 38, p. 452）ことから，結婚したのは1837年頃であると考えられる。それ以前に，ジェインが，ソーンフィールドでロチェスターと恋愛関係になり，結婚の夢が破れ，セント・ジョンや妹達と出会い，再びロチェスターと暮らすようになるまで，おおむね２年近くが経っていると推定される。つまり，ジェインがアデールのガヴァネスとしてソーンフィールドに入ったのは，1835年頃でジェインが18歳の時である。

さらにさかのぼって，ロチェスターは，ジェインと出会う以前に，狂った妻バーサを隠し，10年間様々な国をさまよった（Ch. 27, p. 310）と語っている。このことから，バーサを連れてジャマイカからソーンフィールドに移ったのは，1825年頃と判明する。1825年以前に，ロチェスターは，ジャマイカでバーサと結婚し，そこで４年間暮らした（Ch. 27, p. 306）という記述から，ロチェスターとバーサが結婚したのは1821年頃であることがわかる。

バーサの父メイスンは，西インド諸島のジャマイカのスパニッシュ・タウンに住む大農園主にして商人である。当時の大規模なプランテーション農業は，奴隷制による搾取から生み出され，宗主国や農場主に莫大な富をもたらした。バーサの父は，このような状況の中で蓄えた莫大な財産を背景に，娘と結婚する者には３万ポンドの持参金をつけると公言した（Ch. 27, p. 305）。

彼の昔からの知り合いであったロチェスターの父は，次男のエドワード・ロチェスターをメイスンの娘と結婚させることにした。当時，地主や貴族階級の相続慣行は長子相続制が一般的であった。相続からの恩恵を受けられない長男以外の息子達は，聖職者や研究職，軍隊の士官などに就く者が多かった。ロチェスターの父もこの慣行に従って，自分の財産はすべて長男に譲るが，次男にも自分の息子として誇れるほどの財産を持って欲しい，と考えた。また，メイスンの側にとっても，ロチェスターの，何代にもわたる古い地主階級という家柄は魅力があった。そこで父親達は，大学を卒業したばかりのエドワードを，西インド諸島に向かわせた。バーサは当時，その美貌からスパニッシュ・タウンの自慢の種ともてはやされていた女性である。親達はその２人を，1821年ごろに結婚させたことがわかる。

西インド諸島のイギリス植民地における奴隷制の廃止は1834年に制定され，完全に奴隷が解放されたのは1838年である。それゆえ，ロチェスターがバーサと結婚し，スパニッシュ・タウンで暮らしていた1821年当時は，２人は奴隷達に囲まれ，大規模農場の中で非常に裕福な暮らしをしていたということがうかがえる。

『ジェイン・エア』の中で，何度かロチェスターは，奴隷と関連付けた発言をする。次の文章は，その中の１つである。

Hiring a mistress is the next worse thing to buying a slave: both are often by nature, and always by position, inferior; (Ch. 27, p. 311)

愛人を持つことは，奴隷を金で買うことに次いで悪い行為である。奴隷も愛人も，人間の本質的な部分で劣る者が多く，心的態度においては，１人残らず劣等な者達である[1]。

この発言からは，愛人も奴隷も人間的に劣等な者達であるという蔑視がうかがえる。この発言に対し，バーサと同じ，西インド諸島に住むクレオール[2]という立場の作家，ジーン・リースは，著書の中で「奴隷および愛人所有への人道的嫌悪だけでなく，隷属させられた者への偏見，奴隷/愛人所有者は奴隷あるいは妾という劣等な人間の影響ゆえに堕落するという驚くべき考えが，何のためらいもなく表明されている」[3] と述べ，当時の白人至上主義を厳しく非難している。また，ロチェスターは，バーサはクレオールである母から狂気を受け継いだと考えているが，山根木加名子氏はこれについて，「妻を狂人と断定するロチェスターの言葉の背後には，クレオールの女性の道徳性や知性を劣等とみなす英国人の差別意識が働いている」[4] と指摘する。

また，他の場面では，ロチェスターとジェインの間で，冗談めいたニュアンスに包まれた奴隷売買の会話が出る。

"And what will you do, Janet, while I am bargaining for so many tons of flesh and such an assortment of black eyes?" (Ch. 24, p. 269)

「ジャネット，それなら，私が莫大な数の奴隷や様々な色合いの黒い瞳を持つ奴隷達を取引している間，あなたは何をするつもりなの？」

一見，婚約者同士の他愛もない会話のようであるが，彼のスパニッシュ・タウンでの結婚生活は，奴隷と深いかかわりがあったということに意識を向けるならば，この言葉は，現実的で暗い重さを持つ。軽口の裏にひそむのは，忘れ去ることを許さない過去の生活とバーサの狂気の姿である。

この小説のバーサの退場の仕方についてスピヴァクは，「バーサが家に火を放ち自らを抹消したおかげで，ジェイン・エアは英国小説におけるフェミニズム的個人主義者のヒロインとなる。私はこれを，一般的な帝国主義の知（エピステーメー）の暴力のアレゴリーとして読まずにはおれない」[5] と述べている。彼女の主張からは，イギリス経済の繁栄を支えるために犠牲

1 以降，本文からの日本語はすべて加塩訳。直訳よりむしろ，日本語にしてわかりやすい訳になるように努めた。引用はすべて以下のテキストに従い，本文引用末尾に章とページ数を記載する。*Jane Eyre.* (New York: Oxford University Press, 2000)

2 ここでのクレオールとは，西インド諸島に移住した白人の子孫や，現地の人との混血児を指す。

3 ジーン・リース『サルガッソーの広い海』小沢瑞穂訳，みすず書房，1998年，272-73ページ。

4 山根木加名子『現代批評でよむ英国女性小説――ウルフ，オースティン，ブロンテ，エリオット，ボウエン，リース』鷹書房弓プレス，2005年，11ページ。

5 ガーヤットリー・C・スピヴァク『ポストコロニアル理性批判』上村忠男訳，月曜社，2003年，190ページ参照。

にされるジャマイカの姿と，イギリス人女主人公の美徳を際立たせるために登場させられたクレオールの姿は一体であることが読み取れるのではないだろうか。

実の妹バーサに傷つけられたメイスンは，ジャマイカへ帰る途中マデイラの首都ファンシャルに立ち寄る。そこで偶然にも，古い友人であったジェインの伯父，ジョン・エア（John Eyre）と接触する。ジョンも，貿易を仕事にしている資産家であった。ジェインが伯父にあてた手紙からこの２人は，妻帯者のロチェスターがジェインと結婚しようとしていることを知り，それを阻止しようとする。この２人の行動が，それ以降のジェインの人生に大きな影響を与えることになる。結婚式は中断され，最終的にジェインは，ジョンの莫大な遺産２万ポンドを相続することになるのである。

イギリスは当時大西洋をヨーロッパ（製品），アフリカ（奴隷），西インド諸島（原料）の３拠点にわたった三角貿易を行っていた。この三角貿易は，当時の大英帝国の中核をなしていた[6]。つまり，メイスンがたどったジャマイカ，イギリス本国，ファンシャル（西アフリカ）という航路は，この三角貿易の道筋を示している。このことから，シャトルワースは，「ジョン・エアの富も，奴隷売買と何らかのかかわりのあるものであることを暗示している」（Shuttleworth, p. 478, n. 294）ことを明らかにした。

第３節　インド

前節では，ジャマイカを中心に，イギリス本国と植民地の関係について述べた。この節では，インドとイギリスの関係を考える。作品の中のヒンドゥー教への言及をその理解のための根拠としたい。

ジェインは，伯母がローウッド学院のブロクルハーストに「この子は嘘つき」と言い，彼もそれを信じてしまったことに大きな不安を感じていた。ジェインは，学院の人達にそれを広められるのを恐れたのである。彼女は，学院でブロクルハーストの眼に留まり，皆の前に引き出され，椅子の上に立たされる。そして彼は，「この子は嘘つきであるから，気を付ける様に」と，女生徒達に命令する。

> “...this girl, this child, the native of a Christian land, worse than many a little heathen who says its prayers to Brahma and kneels before Juggernaut －this girl is －a liar!”（Ch. 7，p. 66）

> 「この少女は，キリスト教の地の生まれではあるが，ヒンドゥー教のブラフマーの神に祈りをささげ，ジャガノートの前にひざまずく小さな異教徒よりも，邪悪な存在である。この子はうそつきだ！」

女生徒達を恐怖で震撼させたブロクルハーストの言葉は，キリスト教と比較して，ヒンドゥー

6 イギリスから西アフリカへは，布や日用雑貨，武器などが輸出され，黒人奴隷と取引きされた。そこで，高くても３ポンドで手に入れた奴隷を，西インドやアメリカ大陸の奴隷制プランテーションなどに25ポンドから30ポンドで売り，代わりにそのプランテーションで奴隷を酷使することによって栽培した砂糖やタバコ，綿花などを仕入れて，イギリスにもたらした。

教の儀式を貶めて発言したものである[7]。ブロクルハーストは，ここでヒンドゥー教という「邪教」の底知れぬ恐ろしさや教徒の愚かさと，その異教徒の世界に布教活動によって光明をもたらすキリスト教の優位性を念頭において発言している。

ジェインがソーンフィールド邸でガヴァネスとして働いている頃，再びインドと関連付けた発言が出てくる。それは，ヒンドゥー教の古い慣習「サティー」（suttee）に言及する場面である[8]。ロチェスターと婚約期間中のある夕方，ジェインは，彼が自分のために歌を歌ってくれるのに耳を傾ける。そして彼女は，歌詞の一節の「わが愛しき人は，契約の印となるキスで誓ってくれた。ともに生き，ともに死ぬことを」[9]（Ch. 24，p. 272）という表現を会話の糸口にとらえる。そして，次のように話すのである。

> "...I had as good a right to die when my time came as he had: but I should bide that time, and not be hurried away in a suttee."（Ch. 24，p. 273）
>
> 「私には男性と同様に，自分の死ぬべき時に死ぬ権利があります。その時までこの世にとどまり，サティーで死に急ぐようなことはしません」

この会話の後ジェインは，たとえ婚約中であっても，男性に従属しない生き方を貫くことの大切さに気づく。そして，個々の人間として認め合うことがお互いの利益にもなると考えるのである。このサティーに関する発言から，ジェインの主体性を持って生きていきたいとする積極的な姿と対比され，宗教に縛られ，自分の人生を生きることができず，従容として死を受け入れるヒンドゥー教徒の女性達の姿が浮き彫りにされる。

この２つのヒンドゥー教に関する発言を受けたように，その後セント・ジョンが，インドにキリスト教を布教し，「邪教」を一掃しようとする。彼は，インドという植民地で布教活動をすることが，自分の天職であると思う。つまり，インドという「未開の種族」（savage tribes ; Ch. 34, p. 408）が住む地に，キリスト教という崇高な宗教をもたらすことは，完全なる善であると考えたのである。

> "My hopes of being numbered in the band who have merged all ambitions in the glorious one

7 ジャガノート（Juggernaut）とは，ヒンドゥー教における３大神格の１つ，ヴィシュヌの第８化身である女神クリシュナの称号である。インド東部のプリ市では毎年の例祭に，この偶像を巨大な山車に乗せて市中を引き回す習わしがある。山車には直径７フィートの車輪が16個付いていて，これにひき殺されると極楽往生ができるという迷信があった。そのため進んでその前に身を投げ出し，車輪の下敷きになる狂信者が多かったということである。（松村昌家編『『パンチ』素描集　19世紀のロンドン』，岩波文庫，1999年，45ページ参照。）

8 "Suttee: the Hindu practice where a widow immolated herself on her husband's funeral pyre. It was rendered illegal by the British in 1829. Brontë would have been familiar with the concept from newspaper and periodical discussions. *Blackwood's*, for example, carried an article, 'Burning of Indian Widows' in February 1828, calling strongly for its abolition."（Shuttleworth, p. 476, n. 273 ）この大意を記せば，「サティーとは，ヒンドゥー教の中で，夫が亡くなったら，妻も夫の葬儀の積み薪で一緒に焼き殺されるという慣習を意味する。この慣習は，1829年に英国人によって非合法であるとされた。1828年２月にブラックウッズ紙に「インド人の未亡人を焼き殺すこと」という記事が掲載され，その廃止を強く訴える声が上がったことなどから，シャーロットもサティーの概念について知っていた可能性がある。」

9 "My love has sworn, with sealing kiss, With me to live －to die,"

of bettering their race－of carrying knowledge into the realms of ignorance－of substituting peace for war－freedom for bondage－religion for superstition－the hope of heaven for the fear of hell…”（Ch. 32, p. 374）

「私の望みは，栄光ある大望に，自分の願望を溶け込ませた人々の一員に加わることです。栄光ある大望とは，彼らをより良い種族に変えるということ，無知の王国に知識をもたらすこと，戦争に代わる平和をもたらすこと，隷属ではなく自由を，迷信ではなく宗教を，そして地獄の恐怖ではなく天国の希望をもたらすことです……」

セント・ジョンは，キリスト教が普及する前のインドを表すのに，「無知の王国」「戦争」「隷属」「迷信」「地獄の恐怖」などの言葉を用いている。彼は，「知識」「平和」「自由」「宗教」「天国の希望」は，キリスト教が広まる前のインドには存在していない，と考えている。ここには「未開の種族」が住んでおり，そこにキリスト教という光明をもたらすことは，彼らを「より良い種族」に変えることであると考える。ちなみに，セント・ジョンの強烈な理想主義者としての性格に関しては，インドへ渡った有名な宣教師，ヘンリー・マーティン（Henry Martyn）をモデルにしたものであろうと考えられている[10]。

セント・ジョンの言葉には，ロチェスター以上に，植民地を蔑視した意識が現れている。彼の行為は，異教徒をキリスト教徒に変え，「人間化」しようとする，つまり「帝国の目的に役立つように，植民地の人々の人格改造をはかろうとする」[11] のである。彼のプロポーズを最終的に受け入れなかったジェインは，このような英雄気取りを，無意識のうちに見抜いていたと考えることもできる[12]。

以上の議論から，『ジェイン・エア』の登場人物達は，植民地と密接なかかわりを持っていたことや，そこから強い影響を受けていたことが明確になった。宗主国から見た植民地の文化的劣等性が，帝国主義下におけるイギリスの対外進出の根拠とされ，作中に盛り込まれていることが理解できる。これを受けて，次章では，イギリス女性と他国の女性の描写に焦点をあて比較検証する。作品の中にはフランスやその他の国の女性に関する多くの表現が見られる。それらの表現に含まれる自国イギリスに対するプライドを考察の対象としたい。

---

10 ヘンリー・マーティン（1781-1812）は，シャーロットの父パトリック・ブロンテ牧師が敬愛する伝道師チャールズ・シメオン（Charles Simeon, 1759-1839）の弟子で，ブロンテ牧師とはケンブリッジ大学のセント・ジョーンズ・カレッジでの知り合いであった。彼は，聖書をヒンドゥースタニー語に翻訳したが，若くして熱病で亡くなった。「彼が恋人のリディア・グレンフェルと別れた時の様子がセント・ジョンの行動の描写に反映している可能性がある」（Christine Alexander and Margaret Smith, *The Oxford Companion to the Brontës* Oxford Univ. Press, 2003; Cf. p. 319）と指摘する学者もいる。また，シャトルワースは「シャーロットは，キースレーの機械工科大学の図書館（Keighley Mechanics' Institute Library）で催された 『ヘンリー・マーティン回顧展』（*Memoir of Henry Martyn*）の中で彼の業績を知った可能性がある」（Shuttleworth, p. 481, n. 344）と記している。

11 山根木加名子，上掲書，17ページ。

12 セント・ジョンのモデルには，複数の人物がいたのではないかと考えられていて，ヘンリー・ナッシーもその１人であろうと言われている。彼は牧師としての仕事を手伝って欲しいから，という理由でシャーロットに結婚を申し込んだ。シャーロットはすぐさま断ったようであるが，この結婚に対する態度が小説内のセント・ジョンの性格の一端と結びついたのかもしれない。「彼も一時期，宣教師としての仕事に興味を示したようだが，結局失敗に終わり，シャーロットを大いに面白がらせた」（Shuttleworth, p. 484, n. 402）という記録が残されている。

第２章　イギリス文化へのプライド

ジェインの夫となるロチェスターの人生には，多くの女性達が関与している。主人公のジェインの他フェアファックス夫人，妻のバーサ，アデールとその母などである。また，ブランシュ・イングラムなどの社交界の友人や，外国の愛人が登場するなど，国際的で多彩な交友関係が，繰り広げられている。ロチェスターの人間観察力は鋭く，その発言も多くの人生経験に裏打ちされ，説得力がある。その中には自国の女性（特にジェイン）と外国の女性を比較した発言も数多い。さらにジェイン自身も，アデールの教育や生活態度を観察する上で気付いたフランス人特有の性質について，何度か言及している。この章では，女性達をめぐる発言から，ヴィクトリア時代中期のイギリスの女性や文化と，他の国の女性や文化とを比較検討し，作者がこの記述にこめた考え方を探りたい。

第１節　フランスとイギリス

初めてソーンフィールド邸でガヴァネス，ジェインと会った教え子のアデールは，歌を歌ってジェインの気を引こうとする。彼女は，パリに住んでいる頃，母のセリーヌ・バランス（Céline Varens）によって歌や踊りを教えられたことや，多くの男女の前で歌ったり踊ったりしたことを話す。ジェインは，母親から教えられたその歌は，子供が歌うには適さず，悪趣味であると感じる（Ch. 11, p. 102）。

アデールの歌や踊りは，イギリスへ来る前に住んでいた環境と深いかかわりをもつ。彼女が誕生する以前，母セリーヌは，ロチェスターの愛人であった。しかし，別の恋人を作り，それが発覚しロチェスターから愛人関係を解消されてしまう。その後，アデールが生まれるが，数年後にはアデールを見捨てて，また別の恋人とイタリアへ逃げる。１人取り残されたアデールは，実の父親かどうかも定かではないロチェスターに引き取られ，イギリスへ帰って来る。彼は，アデールが暮らしていたパリについて，次のように語る。

> “...I e’en took the poor thing out of the slime and mud of Paris, and transplanted it here, to grow up clean in the wholesome soil of an English country garden.”（Ch. 15, p. 144）
>
> 「私はこの哀れな娘を，パリのねばねばした土や泥の中から助けてやって，ここへ連れてきたんだ。イギリスの，田舎にある庭の健全な土壌で，健やかに育ててやろうと思ってね。」

アデールがパリで住んでいた環境は，子供が育つには不適だったのかもしれない。しかし，これはパリという場所が悪影響を与える，と一概に断定はできない。むしろ，オペラダンサーである母親の教育によるところが大きいと思われる。にもかかわらず，作者は，アデールの悪趣味とも思われる歌や，母セリーヌの軽薄で人格的に劣る行いを描くことで，イギリスとフランスの相違を印象づける。そして，ジェインやロチェスターの怜悧な目を通すことで，漠然とした印象であったその相違に，客観的な裏付けを与えている。

ロチェスターに甘えてせがんでいたプレゼントを受け取り，アデールは大喜びする。その様

子を見て彼は，「この生粋のパリ娘」（Ch. 14, p. 129）と，嫌味が混じった声で言う。同様に，ジェインはアデールの姿に，「あだっぽさが血液に流れ，脳に混じり，骨の髄にも風味づけをしている」（Ch. 14, p. 139）という印象を受ける。また，「セリーヌ・バランスの小型版」（Ch. 14, p. 139）とも表現している。別の場面でジェインは，アデールは人の注目を浴びると自分が教えたことを忘れてしまう，と言い，その性格は母から受け継いだものであり，イギリス人の性分には合わないと述べている（Ch. 15, p. 145）。

さらには，最後の場面で，成長したアデールに会った時の印象からもジェインは，彼女の欠点は，依然としてフランス人に特有なものである，と判断していることが次の言葉からうかがえる。

> As she grew up, a sound English education corrected in a great measure her French defects; (Ch. 38, p. 450)
>
> 成長するとともに，健全なイギリスの教育が，彼女のフランス的な欠点を，かなりの程度まで矯正した。（強調は筆者）

それに続く記述でアデールは，ジェインにとって「素直で気立てが良く，正しく道義をわきまえた楽しくて親切な友人」（Ch. 38, p. 450）と表現されている。つまり，ジェインの目を通して，イギリス女性の美徳を備えた女性として描かれているのである。このことから，アデールの成長を描くことで，フランス的悪徳とイギリス的美徳という対比が小説全体を貫いている，ということが看取される。

同様の対比は，ロチェスターの言葉からも見受けられる。それは，彼に対するセリーヌの態度を表現した言葉である。「彼女は，甘い言葉で私に取り入り，イギリス製のズボンのポケット（British breeches' pocket）からイギリスの金貨（English gold）を引き出させたのだ」（Ch. 14, p. 139）。このイギリスを強調した表現は，読者に，セリーヌがフランス人であることを強く意識させる。そして，彼女の計算高く浅はかな行動は，フランス人であるからだ，という印象を与える。

ロチェスターの愛人であった頃のセリーヌは，熱心に彼の男性美を賞賛した（Ch. 15, p. 144）。それに対しジェインは，「私はハンサムですか」という問いに対して，即座に「ハンサムではない」と言っている（Ch. 14, p. 131）。ジェインの応答には，自分の印象を率直に言葉にするのは大人として，また，使用人としての言動にはふさわしくないという判断は見られない。ここには，彼女の歯に衣着せぬ，ストレートで正直な主観のみが存在する。

しかし，２人の女性の生き方の違いが象徴するように，この言葉にはセリーヌの不誠実さとジェインの誠実さが示されている。小説全体を通して，フランス女性の持つ，どん欲なほど自分を美しく見せたいという気持ちや計算高さ，あるいは「性格の浅薄さ」（Ch. 15, p. 145）などが表現されている。それと対をなすように，ジェインによって表現されるイギリス人の，お世辞や婉曲な表現を好まない実直さや誠実さ，あるいは一種の無骨さが描き出されているのである。

第２節　ジェインと各国の女性達

ロチェスターは，大学を卒業するとすぐ，ジャマイカへ行きバーサと結婚した。彼女は，精神病院に閉じ込められている母親や，口のきけない白痴（a complete dumb idiot）の弟を持つ（Ch. 27, p. 305）ことから理解できるとおり，彼女も精神病の遺伝を受け継いでいた。しかも，彼女の病状も驚くべき速さで進行していった，とロチェスターは語る。その結果，「大酒飲みで貞淑でない」（intemperate and unchaste; Ch. 27, p. 306）行動をとるようになり，夫ロチェスターの面目をつぶすほどの苦しみを与えたのである。

その様子から，ついに医者が彼女を狂人であると判断したので，彼女を幽閉する必要があった，とロチェスターはジェインに打ち明ける。そしてその後，ロチェスターは，「バーサが生きている限り，自分はもっと良い女性と結婚することはできないのだと悟った。26歳にして私は希望を失ってしまった」（Ch. 27, p. 307）と述べている。

彼は嵐が襲来しそうな夜に，バーサの，彼を呪う金切り声で目を覚ます。部屋から見えるのは，地震のように唸り声をあげる海や，真っ黒く盛り上がる雲である。赤く熱した大砲の弾のような月は，血まみれの顔で海に沈む前に全世界を一瞥している。一かけらの清涼剤も見いだせない，硫黄の蒸気の中のような熱帯の夜のことである。バーサが言い放つ，どんな売春婦さえも使ったことのないような汚い言葉と，悪魔の口調に時折混ぜられる自分の名前が，耳をつんざく。このジャマイカの夜は，ロチェスターの五感すべてに恐怖や打撃を与える。彼は追い詰められ，ピストルを持ち出して自殺を考える。

意外なことに，その時強い風が大海を吹きわたり，嵐をもたらし，雷鳴がとどろく。ロチェスターはその風を「ヨーロッパからの新鮮な風」（Ch. 27, p. 308）と表現する。その風が嵐をもたらし，空気を清めてくれたのである。このような自然がロチェスターの乾ききった心を潤し，それと共に心の中に１つの希望を授ける。彼はこの地を脱出し，自由が満喫できるヨーロッパに移り住むことを決心する。バーサには適切な看護士をあてがい，自分は気の向くように生きていけばいい，と考えるのである。ここでは，バーサに象徴されるように，彼を苦しめ絶望させ，自殺をも考えさせる熱帯と，彼が自分の理想の女性が存在すると希望を抱き，生きる望みをもたらす潤いのあるヨーロッパが対比されている。

ジャマイカから帰国したロチェスターは，バーサをソーンフィールドに閉じ込め，10年近くヨーロッパ大陸を放浪し，自分に適する善良で知的な女性を探し回った。自分はバーサと正反対の性格の妻を持つことができると思い，またそうすべきだと思ったからである（Ch. 27, p. 310）。しかし，見つけたような気がしても結局，幻想にすぎず，彼の努力は徒労に終わってしまった。

彼は，理想の女性を妻とする夢に破れ，寂しさのあまり愛人を持つことにした。その最初がセリーヌで，それからイタリア人のジアチンタ，ドイツ人のクラーラと続く（Ch. 27, p. 311）。３人とも大変美しい女性ではあったが，自分を裏切ったセリーヌをはじめ，無節操であったり，正直ではあるが心無い人間であったりして，ロチェスターは，苦々しい気持ちで彼女らと縁を切ったと語っている。

数多くの女性にも心を動かされなかった彼を，運命はジェインと出会う道に導いた。ジェインと初めて会った時ロチェスターは，その印象を，「小さくてやせていて青白い人」とアデー

ルに語っている（Ch. 13, p. 118）。また，別の場面では，「……私がハンサムでないのと同様，あなたもきれいな人ではない」（Ch. 14, p. 132）と，彼はジェインに告げている。これらの言葉から，ジェインは，ロチェスターがこれまでに知り合った女性とは違っていることがわかる。

バーサを例にとると，彼女はブランシュ・イングラムの様な女性に属する。2人とも大柄で，肌の色が濃い。その上，狂ってしまったバーサは，ジェインの青白い顔とまったく逆の「赤黒い容貌」（Ch. 27, p. 310）をしている。さらに，バーサやブランシュのみならず，ロチェスターの3人の愛人達も，皆美貌を誇っている。

これに対し，ロチェスター自身初めてジェインに会った時，ほとんど何の興味も持たなかった。彼はその時の様子を次のように表現している。「物静かで小柄な人物が，1人で座っているのが見えた。私は，反対側の柳の木と同様，何の関心も持たずに通り過ぎた」（Ch. 27, p. 312）。ここから，ジェインの存在は人目を引くものではなかったことがわかる。

その後，落馬し不機嫌になっているロチェスターを恐れることなく，ジェインは手助けをする。ロチェスターは，彼女のひ弱な肩に寄りかかった時，何か新しいもの，新鮮な活力や感覚が，自分の体内に忍び込んで来たと語る。

> "...You (=Rochester) find in this stranger（=Jane）much of the good and bright qualities which you have sought for twenty years, and never before encountered, and they are all fresh, healthy, without soil and without taint. Such society revives, regenerates: you feel better days come back－higher wishes, purer feelings;"（Ch. 20, p. 218）
>
> 「20年間探し続け，決して見つけ出せなかった多くの善良さや美点を，その人は備えている。生き生きとして健康的で，汚れや害悪とは無縁なものを。そんな人との付き合いが，私に元気を取り戻させ，改心させてくれる。より高みをめざし，もっと純粋な感情を持っていた，かつての自分がよみがえってくる。」

世界中を駈けめぐり各国の美女達を見てきたロチェスターのことばには，ジェインに対する最上級の賛美が込められている。前出の美しい女性達への，彼の辛辣な言葉に比べると，不器量であるといった言葉は，ほめ言葉であるという印象に変わる。それは，ジェインがロチェスターに対して美男子ではないと言った言葉を，驚きながらも，喜ばしいものとして受け取ったのと同様である。ここに描かれているのは，表面的な美ではなく，内面の美を賞賛するロチェスターの心中の価値の大転換である。強い意志を持つ人間の魅力とそれを理解できる人間の聡明さに対する作者の崇拝を，ここに認めることができるのではないだろうか。

作者シャーロットは，妹達が常に美しいヒロインを設定した物語を描いたことに不満を感じていた。そして，妹達に「私と同じように無器量で小柄なヒロインがあなたたちの美しい女主人公と同じように興味深い人物になることを見せてあげます」[13] と言い，容姿の美や財産という外面的なメリットは一切持たず，ただ内面の美しさだけが優れているヒロイン，ジェインを作り出した。この節でみてきたように，ジェインと各国の女性達という比較の構図からは，こ

13 "I will show you a heroine as plain and as small as myself, who shall be as interesting as any of yours." Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë.*（London: Penguin Books, 1997）p. 235.

の時代のキーワードである「美徳」という言葉が浮かび上がってくる。ここには，内面の価値こそが，真にその人間を決定づけるものであってほしいという作者の気持ちが看取される。

第３節　様々な国の労働者階級の娘達

ジェインは，セント・ジョンの見つけてくれたモートンの学校の先生として働き始める。その学校の生徒達は，小作農家や農夫の娘達，いわゆる労働者階級に属する娘達である。ジェインは，彼女達のあまりの無知さや貧しさ，粗野さを見るにつけ，彼女達の教育に当たらねばならない「自分の地位が下がった」という印象を抱いた（Ch. 31, p. 359）。上昇志向の強い彼女にとって，社会的存在の階級が下がったという意識は，大きな打撃となるのである。

しかし，次第に教え子達の中にも機知に富んだ少女や目を見張るほどの伸びを見せる少女もいることがわかってきた。また，多くの生徒達が，親切で気だてがよく，良い性質をもっていることも発見した。その後に，ジェインは伯父のジョンから多額の遺産を受け継ぎ，モートンの教師を辞めることになる。クリスマスが近づき教え子達との別れを惜しむ描写の中に，次のような文章がある。

> ...the British peasantry are the best taught, best mannered, most self-respecting of any in Europe: since those days I have seen paysannes and Bäuerinnen; and the best of them seemed to me ignorant, coarse, and besotted, compared with my Morton girls.（Ch. 34, p. 389）
>
> イギリスの小作農民は，どのヨーロッパ大陸の人達よりも，最も教育に適していて，行儀がよく，自尊心を持っている。最近私は，フランスやドイツの小作農の娘達と会ったが，この少女達の中で最も優秀な者でさえ，私が教育したモートンの少女達と比べると，無知で下等な，のぼせあがった娘，という印象を受ける。

ジェインが当時，どこでフランスやドイツの小作農の娘達と接触したのかは，この小説の中には書かれていない。しかし，彼女らに対するこの口調は，手厳しい。「私が教育したモートンの少女達」という表現には，自分が教育し立派になった娘達，という教育者としての矜持が込められているのかもしれない。

かつてジェインは，モートンの学校が開校した頃に，労働者階級の少女達の粗野さや無知，無学さに戸惑った。しかし，日がたつにつれて，少女達の善良さや性質の良さを理解するようになっていった。彼女は，少女達が内に秘めている美徳を見逃していた，という自分の判断の過ちにも当然気づいたであろう。しかし，そこにはあくまで「モートンの少女達（強調は筆者）」という枠が存在し，フランスやドイツの少女達に対しても自分の理解不足の可能性を広げて考えてみるという態度は見られない。

第４節　身びいきの奥に透けて見えるもの

この小説に見られるようなイギリス人の身びいきは，ヴィクトリア時代積極的に海外へ植民地を広げたり，貿易で富を築いたりする彼らの原動力となったに違いない。布教活動にしてもキリスト教の優位性を信じていなければ，ヒンドゥー教の土地を蹂躙し，改宗させることに疑

問を抱くはずである。

『ジェイン・エア』の中に登場する外国の女性達が，地位的，人格的に劣る者ばかりなのは示唆に富む。バーサはもとより，ロチェスターが知り合った女性達にせよ，アデールとその乳母にせよ，ロチェスターを頂点とする家父長制度の中で，自分にふさわしい地位を見つけるか，あるいは人間としてのプライドを捨てて，愛人という立場で安楽に暮らすかの選択肢しかない。どちらも拒否するならば，存在できないという弱い立場にある。頂点に君臨するロチェスターの姿は，あたかも世界に君臨していた当時の大英帝国を想起させる。

彼女ら外国人とは対照的に，ジェインは雇われている身ではあるが，上昇志向と自尊心を持ち，神に造られた同じ人間としての立場を貫きたいと思っている。当時の女性の１人として，家父長制度に組み込まれるのはやむを得ないとしても，イギリス女性として誇り高く生きていきたいと思っているのである。ソーンフィールド邸を抜け出した行動からもわかるように，愛人として生きていくよりも，プライドを保ったままで，飢餓で死ぬ間際まで追い詰められる可能性のある生き方を選ぶ。

「孤独で友人もなく，支えてくれる人がいなければいないだけ，私は自分自身を尊重する」[14]（Ch. 27, p. 317）という彼女の言葉の中には，このヴィクトリア時代を表す言葉，リスペクタビリティ（respectability）と同じ “respect” が用いられている。当時のイギリスでは「名門の家系でない新興階級の者達は，生活規範をモラリティにおくことによって貴族階級の家柄に対抗して行かざるを得ない状況」[15] であり，「ヴィクトリア朝庶民の文学ジャンルである小説にもモラリティが大きな影響を及ぼし」[16] ていた。「道徳的，社会的に尊敬されること，ちゃんとしていること」を表すリスペクタビリティを信念として持ち，自分を厳しく律し，神の御心に叶う道を探すジェインに共感が集まったのは言うまでもない。努力すれば必ず報われるという考え方や，そのために勤勉，節約に励まなくてはいけないという社会思潮が，ジェインの生き方に多くの賛同を与えたのである。彼女は，まさしく新興階級（中流階級）のモラリティを体現した姿であった。

1837年にヴィクトリア女王が即位し，穀物法廃止などを経て，1851年に大英博覧会が開催されている。この時期は，「パックス・ブリタニカ」と呼ばれていた時期である。「断固とした帝国主義の結果の植民地拡大により，イギリスは世界のリーダー的存在であった。当時の国内の雰囲気は自信にあふれ，若いヴィクトリア女王とその時代の反映への期待に満ち満ちていた」[17] 様子からうかがえる通り，現代なら身びいきと感じられるような描写も，当時の読者には自国の気運を正確に映し出していると受け取られたに違いない。当時の英仏間の確執という時代状況も色付けとして加えられ，ヴィクトリア女王のみならず，多くの読者の共感を集めた。

第２章で筆者は，小説『ジェイン・エア』における外国人に関する描写から，当時の大英帝国と外国との関係を見てきた。次章では，このような時代背景を踏まえイギリスの，とりわけ中流階級の女性達の結婚観に焦点を当てたい。「女余り現象」が起きたヴィクトリア時代にあっ

14 The more solitary, the more friendless, the more unsustained I am, the more I will respect myself.
15 内田能嗣『ヴィクトリア朝の小説――女性と結婚』英宝社，1999年，4ページ。
16 同上，4ページ。
17 Akiko Higuchi, *The Discrepancy Between Spoken Language and Written Language: “Bessie’s Song” in Jane Eyre*（英文）『学習院大学言語共同研究所紀要　第22号』学習院大学言語共同研究所，1998年，86ページ参照。

て，主人公ジェインがどのような生き方を模索し続けたかを探る。

第３章　中流階級の女性の結婚

『ジェイン・エア』の中には多くの女性達が登場する。ここではジェインを中心として，中流階級の人々の結婚観について考察する。小説の中で，ジェインは２人の男性との結婚を考えている。ジェインとロチェスター，ジェインとセント・ジョンという２組の関係は，非常に対照的とも言える。この２人の男性の行動や考え方を追ってみると，当時の中流階級の結婚の姿が浮き彫りになるのではないかと思われる。そこで，この章では，ロチェスターと愛情，セント・ジョンと神からの使命，という視点からまとめ，さらにはジェインのその後の人生についても考察したい。

第１節　愛情と結婚

ジェインは，ロチェスターが妻帯者であることを知るまで，彼に対して好意を抱いていた。彼女は，ロチェスターに対し，「……私が呼吸し，何かを考えることができる間じゅう，私は彼を愛さなければならない」（Ch. 17, p. 175）という気持ちを抱き，別の場面でも「……私なら愛することのできる女性を妻として迎えるだろう」（Ch. 18, p. 187）と述べている。このことから，現代の私達ならば，ジェインはロチェスターと結婚するだろう，何らかの支障があってできないならば，たぶん誰とも結婚しないだろうと予測する。しかし，現代とは異なり，次のような発言に，この時代のものの考え方が表れている。

> “I am solved my husband shall not be a rival, but a foil to me. I will suffer no competitor near the throne; I shall exact an undivided homage: his devotions shall not be shared between me and the shape he sees in his mirror.”（Ch. 17, p. 179）
>
> 「私は，夫にはライバルではなく，私の引き立て役になってもらいます。王座の近くには，競争相手は必要ありません。私は，ありったけの忠誠を要求します。私と鏡の中の自分とに愛情を分けるような人は嫌です。」

この言葉は，名家の出で，美貌を誇るブランシュの結婚に対する考え方である。この結婚観の中には，ジェインが大切に思う「愛情」が全く含まれていないことは特筆に値する。ブランシュにとって，夫からの賞賛は必要ではあるが，愛情は求めてはいない，ましてや自分の側からの愛情については一言も触れられていない。

ロチェスターは，耳に心地よい言葉と優しいふるまいで，ブランシュに心酔しているような態度を取り続けた。その行動からジェインは，２人は結婚するだろうと思うが，実際，彼にはその気はまったく無い。ジェインも，彼がブランシュを愛していないことを見抜き，「自分ならば最愛の人を伴侶としたいと思うが，利害の絡んだ結婚をするように教育を受けている人達のことは私の理解できる範囲ではない」（Cf. Ch. 18, p. 187）と述べ，ある程度の理解を見せている。

一片の愛情も無い歯の浮くような言葉と愛想笑い，虚ろな艶やかさと恋愛劇，ロチェスターと社交界の友人との交わりはそれらで占められている。ロチェスターにあれほど微笑みかけ，惹きつけようとしたブランシュの側にも愛情はない。このことはブランシュが，彼の財産が予想されたものの３分の１しかないといううわさを聞いて，手のひらを返したようにロチェスターに冷たい態度をとることからも明らかである。

ジェインの言う，中流階級の人々の愛の無い結婚は，当時は珍しいことではなかった。人を愛することと，結婚とが別のものとして考えられていたのである。そこには，男性と女性の人口差があまりにも顕著であったという社会的理由も存在する。

この時代のイギリスは，海軍力を背景とした強大な力を持ち，影響力を諸外国に強めていった。そのため，多くの人々，特に男性が，キリスト教の布教活動や商売の規模を広げる目的で，世界各地に乗り出して行った。帝国主義を進めていたイギリス本国からは，結婚適齢期の男性が多く国外へ移動した。さらに，ナポレオン戦争の影響で成人男子の数が減少したことや，経済力を蓄えてからの結婚を望み，晩婚化が進んだことなどが社会に大きな影響を与えた。結婚適齢期でありながら，結婚できない女性が多く存在するという，極端な「女余り現象」が起こったのである。当時の記録から，渡会好一氏は次のように指摘している。

> スコットランドも合わせた1851年当時の人口は，男よりも女が約51万人多かった。20歳以上の女性が100人集まると，未婚が30人，未亡人が13人もいて『余った女』が社会問題になっていたから，愛していなくても，求婚されたらチャンスを逃さず，結婚しなさい，こんな忠告がまかり通っていた[18]。

この51万人という男女差は，当時の総人口が2088万人ほどであったことを考え合わせると，深刻な事態であったことがうなずける。

少し時代をさかのぼるが，イギリスの風刺画の第１人者ウイリアム・ホガース（William Hogarth, 1697-1764）は，1745年に「当世風の結婚」（Marriage-à-la-Mode）という６枚構成の絵画物語を描いた。その第１図は，成金で裕福な市民の娘と，家柄は古いが経済的に行き詰った伯爵の息子の婚約を描いた作品である。誇らしげに家系図を指さす伯爵と元ロンドン市長は，子どもたちを結婚させることで，自分に有利な条件を引き出そうとしている。結婚する予定の２人は絵の片隅にいて，互いに背を向けており，娘は弁護士の甘言に耳を傾けている。この物語全体は，金と身分・家柄が絡んだ親同士の思惑による愛のない結婚が理由となり，お互いに不義の道へと走った若夫婦の哀れな末路を描き出している。

18 渡会好一『ヴィクトリア朝の性と結婚――性をめぐる26の神話』中公新書，1997年，5ページ。

第１図　The marriage settlement（結婚契約）[19]

この絵画によって，ヴィクトリア時代にも同様のことが行われていたということが容易に推察される。この絵の情景と酷似しているのが，ロチェスターとバーサの結婚である。バーサとの結婚に際して，彼女の美貌に魅了されたロチェスターは，彼女を愛していると思い込んでいた。しかし，バーサの側からの愛情を伝える表現は無い。身内に狂人がいるという負い目は，現代人が考える以上に深刻であったろうと予想はつくが，それと共に，莫大な持参金を背景に名家と縁戚関係になりたい，というメイスン家の下心が見える。

さらに，＜1882年に「既婚婦人財産法」が制定されるまでは，女性の財産はすべて結婚に際して夫の所有となっていた＞[20] という事実から，結婚により夫の所有となった女性の財産は，離婚する際に再び自分のものとなることはなく，すべてを失うことになっていたのである。このことから，裕福であっても自分の人生を決定できず，夫に頼る結婚以外の選択肢を持たない女性が多く存在していたことがわかる。

第２節　神からの使命と人間

ジェインは，自分は愛情を重要視し，それに基づいた結婚をしたいと考えていた。しかし，ロチェスターの妻の存在が明るみに出されると，自分の愛情と結婚は結びつけることができな

19 デイヴィッド・ダビディーン『大英帝国の階級・人種・性－W・ホガースにみる黒人の図像学』松村高夫，市橋秀夫訳，同文舘出版，1992年，118ページ。

20 John Guy, *Victorian Life*（Great Britain: Ticktock Publishing, 1997）Cf. p. 23.

いのだと悟る。その結果，見知らぬ町を放浪し，ムーア・ハウス／マーシュ・エンド（Moor House／Marsh End）へとたどりつき，セント・ジョンや妹達と知り合う。そこで彼女は，再びソーンフィールドの時とは全く逆の，自分の気持ち（愛情）と結びつかない結婚の可能性に遭遇する。

ジェインは，子供の頃から自分から愛することができる対象を欲する人間であった。それは，ゲーツヘッドにいる頃の次のような描写に表れている。

> ...human beings must love something, and, in the dearth of worthier objects of affection, I contrived to find a pleasure in loving and cherishing a faded graven image, shabby as a miniature scarecrow. ...I could not sleep unless it was folded in my nightgown; and when it lay there safe and warm, I was comparatively happy, believing it to be happy likewise.（Ch. 4, p. 28）
>
> 人は愛する対象が必要であるが，私は愛情をかける価値のあるものを持たなかったので，色あせ，すりきれた小さな案山子のような人形に愛情を注ぐことに喜びを見いだそうとした。……人形が，私のガウンにしっかりと包まれていないと眠ることができなかった。安全に温かくくるまれているのを見ると，安心した。人形もわたしと同じように心安らかなのだろう，と思いながら。

ジェインが我慢できないと考えた愛の無い結婚，特に自分の感情とは全く結び付かない結婚の申し込みが，セント・ジョンの口から出る。彼の心の中には，人間に対する真の愛情は存在しないのではないかと感じさせるほどの，強烈な信仰心がある。オリヴァー嬢の美しさに対する賛美の気持ちはあるが，それ以上のものではない。セント・ジョンにおいては，すべてが宗教心という名の下に支配されているのである。また，「私は常に，妹達を愛してきたし，その愛情が何に基づいているのかも自覚している。妹達の人間としての価値に対する尊敬と，彼女らの才能に対する賛辞である」（Ch. 33, p. 388）という言葉からは，愛するには理由が必要である，という理屈っぽさが感じられ，それと同時に，自分の妹であるというだけで理屈抜きの盲目的な愛情を持っているわけではない，という冷淡さが透けて見える。

この態度は，ジェインがロチェスターに対し，「わたしもバーサと同じように狂ってしまったら，やはり嫌うのでしょう」という問いかけに答えた彼の愛情表現とは著しい違いを見せ，２人の性格の相違を際立たせている。

> “Your mind is my treasure, and if it were broken, it would be my treasure still: if you raved, my arms should confine you, and not a strait waistcoat－your grasp, even in fury, would have a charm for me: if you flew at me as wildly as that woman did this morning, I should receive you in embrace...”（Ch. 27, p. 301）
>
> 「あなたの心は，私の宝だ。そしてもし，それが壊れたとしても，それでもなお，宝物だ。あなたが荒れ狂ったなら，窮屈な緊縛衣ではなく，この腕の中に閉じ込めよう。あなたの抱擁は，たとえそれが憤激からであったとしても，私には魅力的だ。今朝，あの女性が私に飛びかかってきたのと同じように，荒々しくあなたが飛びかかってきたら，抱きし

めて受け止めよう。」

ここには魂から搾り出すようなロチェスターの，熱く人間的な愛情，つまりセント・ジョンが，神から自分に与えられた使命を優先させるために切り捨てた人間の心がある。ロチェスターが「火」のように熱い情熱を持っているとするならば，セント・ジョンは，「水」のような冷静さを備えた理性が形を成したものと理解できる。

結婚と関連付けてジェインは，セント・ジョンの心性を，水にたとえて次のように述べている。

> I felt how－if I were his wife－this good man, pure as the deep sunless source, could soon kill me; without drawing from my veins a single drop of blood, or receiving on his own crystal conscience the faintest stain of crime.（Ch. 35, p. 411）
>
> もし，私が彼の妻であるならば，善良で，太陽の届かないほど深い水源のように純粋なこの人は，私の血管から一滴の血液を流すこともなく，即座に死なせることができるであろう，と思った。自分の水晶のような良心に，罪のかすかな汚点を残すこともなく。

セント・ジョンは，その冷酷とも言えるほどの純粋さでジェインに結婚を迫る。自分から愛情を注ぐことができる対象を求め続けたジェインに対して，セント・ジョンは，神への奉仕や義務を優先させようとし「判断の誤り」（an error of judgment; Ch. 35, p. 418）を犯させようとした。しかし，「感情，情熱を人間存在の核と見なすジェインが，セント・ジョンのこうした生き方に共鳴できるはずがない」[21] ことから理解できるように，最終的に彼女は「……わたしと同等なものはここにいる」（…my equal is here; Ch. 23, p. 254）と明言する，自分と同じ情熱を持つロチェスターの元へと帰っていくのである。

これまで見てきたように，地位や財産，一族の都合などから親や親族によって決められた結婚，また神に対する義務を自分の気持ちに優先させた結婚をして，自分の愛情を押し殺して家庭に入り，穏やかな顔をして生活を営むことが女性に要求されることも多かった。小説における「自分の性質の持つ炎は，絶えず低く保つことを強いられ，心の内部で燃やすことを強要され，決して泣き声を上げず，閉じ込められた炎が内臓を次々と焼き尽くす」（Ch. 34, p. 408）有様は，ジェインのみの心の状態にとどまらなかったのである。

第３節　ジェインの結婚

ロチェスターからの「違法のロマンス」（illegal romance）[22] も，セント・ジョンからの「合法的売春」（legalized prostitution）[23] も退けたジェインは，その後ファーンディーン（Ferndean）でロチェスターと再び出会うことになる。ソーンフィールドにいた頃のジェインには身寄りも財産もなく，ロチェスターとの関係は雇い主と使用人の関係であった。また，ロチェスターに

21 神山妙子編『愛と結婚――イギリス小説の場合』国研出版，1989年，83ページ。
22 Shuttleworth, Introduction, xxx.
23 Ibid., xxxi.

は，狂ってはいたけれども妻がいるゆえに，彼は正式には結婚できる立場ではなかった。

しかしその後，ジェインが親族や財産を手に入れている間に，バーサが死亡し，ソーンフィールドは焼け落ちてなくなり，ロチェスターは視力と左腕を失った。彼に降りかかった災難は，あたかもソーンフィールドを去ることができなければ，ジェインの良心が自分に科すといった刑罰と同じ状況であった。それは，まさしく「お前は，自らの手で右の眼をくりぬき，右の手を切り落とさねばならない」（Ch. 27, p. 297）という表現に表れている。ロチェスターはこの，良心が科した罰を実際に受けたことにより，贖罪を果たしたと考えられる[24]。

バーサが死に，ロチェスターがその罪を償った後では，２人の結婚には何の障害もない。ジェインとロチェスターは，結婚にあたって次のような会話を交わす。「それならば，お選びください，あなたを最も愛する女性を。」「私は選ぶのだ，少なくとも自分が最も愛する女性を。」（“Choose then, sir－*her who loves you best.*” “I will at least choose－*her I love best.*”; Ch. 37, p. 445）。「あなたを最も愛する女性」と「自分が最も愛する女性」が一致し結婚することは，ヴィクトリア時代にあっても多くの人々の望みであったと思われる。また，「私の信頼のすべては彼にあり，彼の信頼のすべては私にあった。私達は，性格が完全に適合しており，完全なる一致がその結果であった」[25]（Ch. 38, p. 451）という様子は，時代を超えて最良の伴侶とめぐり会いたいと思っている人々の理想の姿である。当時,「この小説がセンセーションを巻き起こし，賞賛の嵐が起こった」[26] ことがそれを裏付けている。

山本紀美子氏は，＜現世に重点をおき精神の糧としての神を信じる敬虔なクリスチャンである Miss Temple こそジェインの理想の女性として描かれている＞[27] とした上で，＜テンプル先生は牧師と結婚して学校を去り「家庭内天使」という道を選んだのであった。ジェインの人生の選択はすでにここに示されていると言えるだろう＞[28] と述べている。つまり，ジェインが最終的に結婚し，家庭に入ることは既に予定されていたことであると考えるのである。

この小説は，２人が結婚して10年経ってから書かれたものという設定である。ロチェスターは，結婚して２年後には片目の視力がよみがえり，その後息子を胸に抱き自分によく似た黒い瞳を見ることができた。ジェインの「これまで，私ほど自分の伴侶に近い女性はいない。さらに，もっと完全に，私の骨は彼の骨であり，肉は彼の肉である」[29]（Ch. 38, p. 450）という言葉は，次の，神がアダムとイブを作り出した人類創世の歴史から引用されている。「そしてアダ

---

24 シャトルワースは，このことについて次のように指摘している。
“The exhortation to purify by self-mutilation occurs elsewhere in the gospels, but significantly it is in this particular passage（=*Mattew*）that it is associated with condemnation of adultery. Joseph Prescott...sees the verses as a commentary on the intended adultery, and actual maiming, of Rochester.”（Shuttleworth, p. 478, n. 297,; cf. *Mattew.* 5:27-32.）
この大意を記せば,「キリスト教の中では，身体的機能を自ら不具にすることで犯した罪の浄化が起こり得ると考えられていた。マタイ伝の１節では，そのような罪の浄化が，姦淫に対する断罪と関連づけられている。ジョセフ・プレスコットは，故意に重婚を企て，結果的に姦淫の罪を犯そうとしたロチェスターの身にその刑罰が降りかかり，不自由な体になったことを表している，と考える。」

25 All my confidence is bestowed on him; all his confidence is devoted to me: we are precisely suited in character; perfect concord is the result.

26 Shuttleworth, cf. Introduction vii.

27 内田能嗣編『ヴィクトリア朝の小説――女性と結婚』英宝社，1999年，25ページ。

28 同上，25ページ。

29 No woman was ever nearer to her mate than I am: ever more absolutely bone of his bone, and flesh of his flesh.

ムは言った，この者の骨は今や私の骨であり，肉は私の肉である。この者は女性と呼ばれるであろう，なぜならば，男性から作られた者であるから」[30]。この場面でジェインとロチェスターは，お互いにとって唯一無二の存在であることが理解できるのである。

第３章では，主人公ジェインを中心として，その愛情と結婚について「女余り現象」という史実を踏まえた上で考察を加えた。当時の女性の結婚に対する理想と，彼女らが直面していた現実には大きな隔たりがあるものの，最終的にロチェスターとジェインが勝ち取った結婚生活は，同じように結婚を望む女性たちの理想の姿であることは否めない。

本稿では，第１章において，ヴィクトリア朝イギリスと植民地との関係を通して，おもに男性の生き方という観点から作品を考察した。第２章では，イギリスと他の国の女性との対比から，当時のイギリスの人々の意識を作中から読み解いた。第３章では，イギリス国内における女性の生き方という観点から，結婚に的を絞り検証を加えた。これによって，ジェインが体現しているものは，困難さに立ち向かう積極性とプライドを持ちながらも，最終的には「家庭の天使」という生き方を自らが選びとり，当時の多くの女性が望んでいた幸福な家庭を手に入れるという「ヴィクトリア朝イギリス女性の理想像」であるということが明確になった。

参考文献

Altick, Richard Daniel. *The Presence of the Present: topics of the day in the Victorian novel.* Columbus: Ohio State University Press, 1991.

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre.* Edited by Margaret Smith With an Introduction and revised Notes by Sally Shuttleworth New York: Oxford University Press, 2000.

Alexander, Christine and Margaret Smith. *The Oxford Companion to the Brontës* Oxford: Oxford University Press, 2003.

Barker, Juliet. *The Brontës: A Life in Letters.* New York: The Overlook Press, 2002.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë.* London: Penguin Books, 1997.

Guy, John. *Victorian Life.* Great Britain: Ticktock Publishing, 1997.

Higuchi, Akiko. *College Records of Patrick Brontë at St. John's College*（英文）『鹿児島国際大学国際文化学部論集 4－1』鹿児島国際大学国際文化学部，2003年。

－－－. *The Discrepancy Between Spoken Language and Written Language: "Bessie's Song" in Jane Eyre*（英文）『学習院大学言語共同研究所紀要　第22号』学習院大学言語共同研究所，1998年。

Malham-Dembleby, John. *The Key to The Brontë Works.* New York: The Walter Scott Publishing, 1911.

Notsu, Yuriko. *Disenchanting the Fairy Tale: A Reading of Jane Eyre*（英文）『英文学研究　英文号47』日本英文学会，2006年。

O'neill, Judith. *Critics on Charlotte and Emily Brontë. Florida*: University of Miami Press, 1972.

Shuttleworth, Sally. *Charlotte Brontë and Victorian Psychology.* Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1997.

Smith, Margaret. *The Letters of Charlotte Brontë with a selection of letters by family and friends.* vol. I.（1829-1847）Oxford: Clarendon Press, 1995.

－－－. *The Letters of Charlotte Brontë with a selection of letters by family and friends.* vol. II.（1848-1851）Oxford: Clarendon Press, 2000.

Teachman, Debra. *Understanding Jane Eyre.* Westport: Greenwood Press, 2001.

30 "And Adam said, this is now bone of my bones, and flesh of my flesh: she shall be called Woman, because she was taken out of Man."（*Gen.* 2: 23）

Thaden, Z. Barbara. *Student Companion to Charlotte & Emily Brontë.* Westport: Greenwood Press, 2001.
Wise, Thomas James and John Alexander Symington, eds. *THE BRONTËS: Their Lives, Friendships and Correspondence.* Philadelphia, Porcupine Press, 1980.
青山誠子　『ブロンテ姉妹』清水書院，1994年。
－－－　『女たちのイギリス文学』開文社出版，2003年。
－－－編　『女性・ことば・ドラマ－英米文学からのアプローチ』彩流社，2000年。
岩上はる子監訳　『未だ開かれざる書物の一葉－シャーロット・ブロンテ初期作品集Ⅱ－』鷹書房弓プレス，2001年。
ウォルター・スコット，菊池武一訳　『アイヴァンホー』岩波書店，1981年。
内田能嗣編　『ヴィクトリア朝の小説－女性と結婚－』英宝社，1999年。
エレン・モアズ，青山誠子訳　『女性と文学』研究社，1980年。
大山敏子　『女性と英文学』篠崎書林，1966年。
神山妙子編　『愛と結婚－イギリス小説の場合－』国研出版，1989年。
川本静子　『ガヴァネス（女家庭教師）ヴィクトリア時代の＜余った女＞たち』中公新書，1994年。
ガーヤットリー・C・スピヴァク，上村忠男訳　『ポストコロニアル理性批判』月曜社，2003年。
君塚直孝　『ヴィクトリア女王――大英帝国の“戦う女王”』中公新書，2007年。
木谷勉　『帝国主義と世界の一体化』山川出版社，世界史リブレット40，1997年。
小池滋　『もうひとつのイギリス史－野と町の物語－』中公新書，1998年。
指昭博　『図説イギリスの歴史』河出書房新社，2004年。
サンドラ・ギルバート，スーザン・グーバー，山田晴子・薗田美和子訳　『屋根裏の狂女－ブロンテと共に』朝日出版社，1992年。
ジーン・リース，小沢瑞穂訳　『サルガッソーの広い海』みすず書房，1998年。
ジョージ・M・トレヴェリアン，松浦高嶺・今井宏共訳　『イギリス社会史　2』みすず書房，2000年。
ジョン・サザーランド，青山誠子・朝日千尺・山口弘恵共訳　『ジェイン・エアは幸せになれるか？　名作小説のさらなる謎』みすず書房，1999年。
白井義昭　『シャーロッテ・ブロンテの世界－父権制からの脱却－』彩流社，1992年。
関根正雄・木下順治編　『聖書』講談社，1986年。
デイヴィッド・ダビディーン　『大英帝国の階級・人種・性－W・ホガースにみる黒人の図像学』松村高夫，市橋秀夫訳，同文舘出版，1992年。
中岡洋　『シャーロット・ブロンテ論』開文社出版，2001年。
－－－　『ブロンテ姉妹～その知られざる実像を求めて』日本放送出版協会，2008年。
長島伸一　『大英帝国　最盛期イギリスの社会史』講談社，1989年。
姫岡とし子　『ヨーロッパの家族史』山川出版社，世界史リブレット117，2008年。
フロラ・トリスタン，小杉隆芳・浜本正文訳　『ロンドン散策　イギリスの貴族階級とプロレタリア』法政大学出版局，1987年。
ヘンリー・メイヒュー　『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』松村昌家，新野緑編訳，ミネルヴァ書房，2009年。
村岡下枝　『ブロンテ研究』学書房，1979年。
村岡健次　『近代イギリスの社会と文化　MINERVA 西洋史ライブラリー㊹』ミネルヴァ書房，2002年。
山根木加名子　『現代批評でよむ英国女性小説－ウルフ，オースティン，ブロンテ，エリオット，ボウエン，リース－』鷹書房弓プレス，2005年。
吉田良夫　『英国女性作家の世界』大阪教育図書株式会社，2004年。
渡辺千枝子　「『ジェイン・エア』の成功の秘密：ドッペルゲンガー（Doppelgänger）の探求」『水の流れに：松

浦暢教授古稀記念論集』松浦暢教授古稀記念論集刊行委員会，2000年。
渡会好一　『ヴィクトリア朝の性と結婚――性をめぐる26の神話』中公新書，1997年。